

「信頼に生きる人」

ルカによる福音書 7章 1～10節

女子聖学院中学校高等学校チャプレン 高橋恵一郎

土曜日となりました。今週も、今日で終わります。一週間、お疲れ様でした。昨日は、運動会準備として代々木第一体育館下見が実施されました。運動会の核になるみなさんの姿を現地を見て、今年の運動会が動き始めていることを強く実感しました。現地に向かった人も、またその人たちを背後で応援した人たちにも言いたいと思います。お疲れ様。

1 百人隊長の部下の病気

本日の聖書箇所には、百人隊長という立場の人が出てきました。今日は、この人の姿に私たちが重ねて、聖書を読んでみたいと思います。

百人隊長とはローマ軍の一つの階級です。人数は必ずしも100人とは限らなかったようですが、ほぼ100人ほどの兵卒を束ねる指揮官です。新約聖書には百人隊長が何カ所か出てきますが、いずれも立派な人たちです。ローマ軍の強さには様々な理由があるようですが、その一つは百人隊長の人格と能力、これが優れていた、ということが大きかったとされています。部下を大切にし、現場を頭ではなく、体で知っている人。そこに起こっている状況を客観的に捉える知性を持ち、恐れず、さまざまな事態に対応する柔軟性と瞬発力のある人、それが百人隊長です。

今日の箇所には、ある百人隊長に重んじられている部下が重い病気になった、という話が出てきました。部下は死にかかっていたのでしょう。絶望的であったのでしょう。その部下がいなくなってもいくらでも補充が効くはずですが、しかし、百人隊長は、家族のようにその部下の命を思っています。

百人隊長は、主イエスのことを聞いていたのでしょう。汚れた霊に取り憑かれた人を苦しみから解放し、多くの病人を癒し、重い皮膚病の人を清め、中風の人を床から立ち上がらせた、と。それだけではなく、敵を愛するように教え、人を怒りや憎しみで裁かないようにと語り、既存の宗教的しがらみを否定し、神の愛を語る、その姿に、この人には何かがある、という思いをもっていたのでしょう。情報と直感から、主イエスが確かな人物である、という判断をし、ユダヤ人の長老たちを遣いにやって、「部下を助けてください」と頼んだのでした。

彼がユダヤ人の長老たちを遣いにやったのは、自分も病気の部下もユダヤ人から見て異邦人であるからです。ユダヤ人は異邦人と接触することを「穢らわしい！」と考えていることを知っているからです。では、遣わされたユダヤ人たちがなぜ百人隊長を助けたのか。その答えは彼らの主イエスに熱心に願う言葉にあります。「あの方はそうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」

百人隊長はユダヤ人らを被支配者として見下さず、愛してくれている。その姿は会堂を建ててくれ

たことに表れている、というのです。「会堂」とは、ユダヤ人が心の拠り所である神殿に代わる集会所のことです。それを迷信だといって馬鹿にすることなく、率先して建ててくれた。自分たちの最も大切にしていることを理解し、裏から表からサポートしてくれている。これはユダヤ人にとっては驚きであり、喜びでありました。

そこで、長老たちは主イエスに言うのです。「あの人は異邦人だけれども、どうか排除しないでほしい。特別扱いしてほしい。あの人の願いを聞き、部下を癒してあげてほしい。そうしていただくのに相応しい人として私たちは評価しているのです。」と。

2 百人隊長の主イエスへの信頼

それが、今回の出来事の背景です。ところが、主イエスが百人隊長の家の近くまで来た時に、意外な展開へと話は進んでいきます。

これまでの流れからすれば、百人隊長は、願い通り主イエスが来てくださったのであるから、「よくいらしてくださいました。ありがとうございます。部下はこちらで苦しんでいます。」と歓迎し、案内するということが予測されます。しかし、百人隊長はそうしなかったのです。彼は友達を遣わして「私は自分の家などにイエス様お迎えできる者ではない」と語らせました。社会的には絶対的上位にあるはずのローマ軍の百人隊長が、定住場所もない一巡回教師という言葉ではありません。しかし、これがただの謙遜ではないことが次の言葉から理解できます。「ひと言おっしゃってください」。自分の部下との経験から、その「ひと言」、そこに力がある！と彼は言うのです。「あなたの言葉は神の言葉であるのですから、一言でも言ってくだされば実現します、私はそのことを信じています」と言ったのです。

主イエスが大変に驚かれた様子が描かれています。「イスラエルの中でさえ、このような信仰を見たことがない」とおっしゃいました。神の民ですら理解していなのに、この異邦人は私を救い主として認めて、謙り、私を通して語る言葉が神の言葉であると理解し、心から信じている、と。そして、遣い行った人たちが家に帰ってみると、果たしてその部下は「元気になっていた」のでした。

3 主イエスが評価したこと

ところで、主イエスはこの百卒長の何を評価したのでしょうか。今、お話したことからも理解していただけと思うのですが、ユダヤの長老たちと主イエスの評価はどちらもプラスであり良いものですが、その内容は異なっています。

ユダヤの長老たちの評価はこの百人隊長がユダヤ人を愛し会堂まで建ててくれたということにあります。つまり彼の実績が良かった、ということです。彼は良いことをした。それは評価に値する、ということです。

それに対して主イエスの評価は、「ひと言おっしゃってください」という信仰の姿勢に対するものであります。そこにあったものはイエスの権威への服従であり、主イエスを通して語られる神の言葉への信頼です。部下が自分の権威に服従し、語った言葉を実行するように、あなたの言葉には権威があり、実現する、という信頼と信仰です。百人隊長が何をしたか、どんなに偉い人であるかではなく、ただ主イエスとその言葉を神の言葉として受け止め、信頼する姿、それを主イエスは高く評価し、感嘆された

のでした。

聖書において大切にされているものは、何をなしたか、できるかではなく、神との関係がいかにあるか、にあるということを教えられます。

4 女子聖学院の運動会と神の国

さて、初めにもお話ししましたが、昨日、運動会会場である代々木体育館の下見が行われました。運動会幹部、各係の担当者の長、PTA やパパプロの中核となる方々が現地を確認し、相談し、体育館の方々と挨拶を交わし、運動会当日に備える時となりました。

私が教師として直接関わる係は「得点」ですが、実行委員をはじめ各係の担当者がきびきびと配置場所や用具の確認をしている姿に非常に頼もしいものを感じました。そこにいた人たちは、女子聖学院の百人隊長、運動会の柱です。

ここで改めて感じたことがあります。それは競い合う3学年が一緒に運動会を作ろうとしている、ということです。3学年は競い合うという意味においては敵同士です。しかし、運動会を作り上げるという点において力を合わせています。その背後にあるのは互いへの信頼です。

各学年が自分のことばかりを考えていたらどうことになるでしょう。審判が自分の学年を鼻直し、招集係や用具係が他の学年の仕事を邪魔し、得点係が不正を行い、実行委員が自分の学年のことしか目を配らない、そんなことがあれば運動会は殺伐とした争いの場に過ぎなくなってしまいます。

運動会について改めて感じたこと、それはこの大会が互いへの「信頼」という土台の上に成り立っている、ということです。「信頼」こそ、あらゆる人間関係において最も重要なことです。女子聖学院の運動会は「信頼」という最高の関係が面に現れた素晴らしい大会なのです。

5 神の国の練習場

百人隊長の神への信頼を主イエスは高く評価しました。神の国がやがて訪れると聖書は語りますが、それは注がれる神の愛と、人々の神への信頼、そしてそこに生まれる安心と喜びが皆を一つにする世界であるのだと私は思います。女子聖学院の運動会は、その喜びの一端を示すとともに、神の国に入る崇高な練習場だと言ってもよいのではないのでしょうか。

ところで、イエス様は百人隊長を褒めています。当時のユダヤ人たちは百人隊長の行ったことは高く評価しているものの、その信仰については、まだまだだと思っていたことでしょう。神殿に捧げ物もしない、祈りも捧げない、律法のこと知らない、割礼だって受けていない。信仰的にはだめだ、と。

しかし、その小さな信仰を主イエスは喜ばれました。私たちの信仰も小さく、ふらふらし、時には信じているのだからどうか分からないようなものであるかもしれません。しかし、それでもこうして礼拝しています。そんな私たちを神様は喜んでおられると言って良いと思うのです。今日もいろいろあるかもしれませんが、でも大丈夫です。神様は私たちを喜び、支えていてくださいます。

おいのり

ご在天の父なる神様。今週も一週間を導いてくださり、ありがとうございます。あなたに信頼する心を

与えてください。あなたに喜ばれていることに気づく心を備えてください。主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン。

2023年5月13日 女子聖学院中学校高等学校礼拝